

8-6 建築には負けないぞ！モチベーションアップで工程回復

1. 立場と仕事

建設会社に入社後、施工条件の厳しい都市土木の現場をいくつか経験した。入社13年目に、大規模な建築工事の現場に工事主任として施工途中から配属された。主体となる建築工事と同時並行するかたちで、土木工事として工事目的物完成までの仮設通路を構築するものであった。

2. 遭遇した事態

全体工程に対して土木工事の工程が大きく遅れて（着任時ですでに3か月）おり、事態を收拾するために配属された。建築主体の現場でかつ土木の工事量に比べて建築の工事量が圧倒的に多かったため、土木は建築工事の合間を縫って施工している状態で、ヤードの使用も制限されるなど作業上の制約が多かった。また、初めて参加した工事全体会議では、大きく遅れた工程を巻き返さないと全体事業に影響すると一方的に言われるがままで、土木工事は下請けと同じ扱いで非常に立場が弱い状態であった。

3. 対応内容とその結果

配属当初の役割は施工計画書等の作成支援であったが、現場の状況を打破するには率先して行動するしかないと考えた。自ら工程を回復させるために様々な工程短縮策を計画し、自ら現場を指揮した。

あくまで仮設構造物であることから早期脱型のためにコンクリートの仕様を変更したり、昼夜・休日作業をしたり、雨で作業ができなかったら、後工程をパズルのように組み替えて対応したりと、とにかく“1日”にこだわって工事を進捗させた。

配属された職員が全員、構築工事未経験者であったため、工種の重要度や専門性を考慮して担当分けし、役割分担を明確化することで個々の負担を軽減した。また、協力会社の職人たちと“建築に負けたくない”という思いを共有してモチベーションを高めた。

一方、建築主体の中でどうにか土木工事の施工条件を改善するために、現場内の人間関係構築にも注力した。建築工事の職長会長や警備員隊長とコミュニケーションを重ねて良好な関係を構築したり、建築工事の資材投入を土木しか施工していない夜間に手伝ったりして味方を増やすことで作業調整を円滑に行えるようにした。

工程回復に積極的に関与した結果、最終的には土木工事の現場をけん引する立場になっていた。

全体工程に対する土木工事の遅れを回復し、無事に工事を完了させた。